No. 1

②

高野先生を憶ふ

慶應　大川八郎

先生は安政三年江戸芝西新堀に市生まれにあり明治十四年八月二十一日六十九才を以てお亡くなりになりました。先生に私が師事したのは明治三十四年頃のことで、その時分先生は元気盛りの三十四五才の時のことでありましたが、自分は四十才近くしか生きられまいと思ってるから、力一杯勉強すると云ふ癖のやうに云はれたものでしたが、四十才を超へてからは、八十才までは大丈夫生きる、それ迄一生懸命に勉強すると云はれるやうにおつた。

相もよい、弟に眉の毛が著しく長く、血色もよかつたのと、八十才まで生きると自身が云はれるのとで、誰しも先生は確に長命であらうと想像してゐた。然るに六十九才

II形 イーグル印原稿箋

12×25

で遂にお亡くなりになったことは真に残念に存ずる次第
であります。偉し先生は全生涯を通じて海藻学を研究せ
られ、我国の海藻学の基礎を築き上げられた偉大なる物
学者であったことは申さまでもないのであります。
先生は海藻の分類学者であったと同時に、水産傳習所
から水産講習所に職を奉ぜられてゐた関係から海苔其他の
海藻類の養殖に貢献されたところが大であったのであ
ります。のみならず年々新に此の海洋生物学談話会で先生を
直接申上げるのは、先生は我国に於けるプランクトンに
関する最初の研究者で、明治三十四年からプランクトン
の研究が水産学上緊要であることを唱へられたので
あります。そして昭和四十年には故西川藤吉さんと共著

で浮游生物原生動物である Tintinnoidea に関する研究を教示され、同年プランクトンを浮遊生物と譯したが、長くて暗くて書くのに暇がかゝるから再び蜂と云ふ字で簡単に云ひ表はしたいと云つたやうな意見を著者された。先生は皆サンも御承知のことゝ思ひますが、全つて性急な方で先生の原稿を書かれたのを見ると実に半の暇い、早いから讀み難い、それほど早い、従て蜂と云つたやうな当字を考案されたものと存ずるのであります。昭和十三年には水産生物學要項と云ふ小冊子を故北原先生と共に執筆され北原サンは海の理化学に関係した部門を著者先生は海の生物学に関係した部門を担当されたのであります、此の事柄が急に角抜ゝに於ける海洋の理化学及生物学が進

事業遂に基礎たるべきものであることを既述した事柄のものであると云ってよろしいのであります。此の出版の出版と同時に改革の水産方面に於て施行されてゐる海洋調査事業の副産である漁業基本調査事業が起ったのであります。即ち本事業の主唱者であった地原先生を助けて其の実現を見るに到った者相見生の功績も亦勘からざるものがあります。

斯く申せば先生は科学者であり其の専門を水産に致されたお者のみであったかのやうに考へられますが、決してそうではなく、文藝に音楽に俳句に和歌の多い方であった、地方あちこへ旅行されると俳句をひねって往来物を蒐集されて徳川時代の庶民教育の状態などを

興味を以て深く研究されたり、淨瑠璃や芝居が好きで、長唄は先生の最も得意とされたとうで、宴席その他の席上で先生の長唄の出ないことはないと云つてもよい程、上手下手を超越して唱はれた一つの道樂であります。

先生は文章が達者で隨筆を物され、又地方あちこへ出張して其地の有志の請を受れて碑文を綴り或は揮毫の席上

里謡などを聞かれると席に侍べつた藝者や女中さんなどの名前を取り入れた里謡を即座に作つて直ぐ其れを歌はしむるなどといつたやうに文才に富んでゐられた。

先生は海軍の祖父であるスウェーデンの Carl Adolf Agnath 及 Jacob Georg Agnath 両子を男爵され、特に後者は太平洋戰の海軍を指揮した関係上、其の命日

（一九〇一年一月十七日）

又は多後に水産講習所業務科の学生を自宅に招き、酒は絶対抜きに、雑煮、安倍川餅、蕎麦、寿司位で、御馳走は粗末であったが、気の置けない、情のこもった集会を催され、アガードの冒頭を祭壇に飾って、海藻学上の功績を讃へ、一夕を愉快に師弟時を交へて相親るとゝろ多く、[illegible]集を携へられたものです。

この催しは既に十四年（一九〇二年）から十年位は継続しましたが、学生の数が増えたので[illegible]出も[illegible]に移せられたが、聞くところに依ると先生御自身には[illegible]なくなりにあるまで毎年アガードの命日には[illegible]其の霊を慰められたと伺ってゐます。

アガード氏と私